

第190回 令和8年3月9日（月）

「一元論について。」

もしAIに眼があって、脳があったらこの世界はどのように見えるのでしょうか。

私たちの目がものすごく良くなって、脳の認識スピードが変わったら、世界はどう変わるのでしょうか。

理科で勉強していると思いますが、物質は分子や原子などで造られています。しかし私たちの目や脳はそれを認識できません。たとえば目の前のリンゴが丸い形に見えて、触ると固いのは目や手から得られた情報を脳がそのように解釈しているからです。

実際の世界は分子が緩くつながっている液体や、細胞が集まっている人体、分子が固く結合している固体などでできていて、色も私たちの脳がそのように認識しているに過ぎません。

人体などは細胞が何日かすればすべて入れ替わるので同一のものに見えないかもしれません。

つまりこの世界は私たちの意識（自我）がそのように解釈している世界であり、世界と自我は同一であると考えるのが一元論です。

世界はもともと存在していて、そこに生命を持った人間が生まれ、やがて去っていく。その後も世界は続いていく。このような考え方が二元論で、世界と自我はイコールではありません。おそらくほとんどの人はこちらのほうがわかりやすい考え方だと思います。

どちらが良いか悪いかではありません。さらに一元論は善と悪とか、男性と女性とか、対局という概念はあまりないので、すべてはもともと一つのものであると考えます。諸行無常と言って永遠に続くことや形のあるものが永遠に壊れないということはありません。

一元論が正しいのか二元論が正しいのかはそれぞれの考え方です。それでも一元論の立場で見れば、人間が争ったり、戦争をしたり、殺しあったりすることがいかに虚しいことか。だってもともと全て同じ分子の集まりなのですから。

昔「マトリックス」という映画がヒットしました。本当だと思っていた世界が実は違っていたというストーリーです。古代の中国の思想家は、自分は蝶が見ている夢の中の存在かもしれないと考えました。哲学的に世界を考えてみるのも興味深いものです。

対人関係に悩んだ時など、哲学を学ぶと新しい考え方が生まれます。哲学自体が昔の頭の良い人たちが悩みから考え出した解答なのです。